

神と共に歩む人生
ヴァルヘルム・ブッシュ
(8回連載、第6回)

第六章 確信をもつて

人生を生きていける聖書

はっきり言えることは、この世で一般に「宗教」と言われているものからは私たちの人生を確実なものにする基盤は得られない、ということです。この世に多く存在する「宗教」は、その中心である神や仏なるもの、または人間が作り出した偶像的な人や物などを崇拜し、善行、修行、精進、献金、奉仕などを強要するものです。また、その求道や修行は、どこまで行ってもこれでいいという終わりがありません。その教義は人間的な知恵や悟りに拠っているので相対的であいまいです。ですから、このような宗教の中に人生の不動の基盤、確信、平安を求めても、それらが得られることはありません。その多くは「何々をすれば何々が与えられる」という応報主義ですが、信者の努力に与えられる「報い」には何

の確約もなく、何の確実性もありません。宗教を信じることによって得られる安心感も、単なる気休めに過ぎないことが多いのです。ですからこの世の多くの人々は「宗教」と聞くと、それだけで不確実なもの、怪しげなものと思って逃げ出してしまふのです。

しかし、聖書が説く「福音」は、それらとはまったく異なるものです。「福音」は、人間が考え出したものではなく、まことの神が私たちに提供しようとしておられるものです。ですから神の方から人間に「福音」を伝えようと、一人ひとりを探し求めておられます。これらのことを明らかにするために、この章のテーマは、「聖書から人生の確信が得られるか」としたいと思います。

人々は神について、 確信を持ってないでいる

現代人は、日常生活では明敏で実利的です。例えばちょっとした痛みとかがあると、すぐ医者に行つて原因と療法を知ろうとします。「先生、ここが痛いのですが、何の病気でしょうか。どうすれば直りますか」と聞きます。

いま一つの例を出しましょう。お手伝いさんを募集しているという状況を想像してください。雇い主の女性は、応募してきた女性にこう説明します。「あなた用のテレビのある個室を用意しています。疲れた時は音楽を聴いて休憩していいです。休日は週に一度。それも完全にお休みになります」と。応募してきた女性は「素敵ですね。でも私が知りたいのは、お給料はいくらで、その支払いはどういう条件かということです」と言います。そこで雇い主はこう答

えます。「わかりました。でもそれは、まずあなたがどのように働くかを見せてもらってから決めましょう」。応募者は言います。「それだと私はここで働くかどうかを決められません。まず、給料がいくらか、支払いの条件はどうかをはっきりと知りたいのです」

このやり取りは、基本のところでは食い違っています。もちろん、仕事を捜す時に最も大事なことは、給料がいくらなのかということです。その金額を明確にしないのは不誠実です。私たちは金銭的な問題を後回しにしたまま仕事に就くことはできません。他のことについても、時間や労力を使うからには、その対価が明確でなければ取り掛かれません。それは当然です。ところが宗教では、いわゆる神や仏、偶像から何を得られるのか、という最も大切な点を明確にせず、驚くほど不確かなままで入信を勧められることが多いのではないのでしょうか。これはまさ

しく宗教側の不誠実であり、怠慢です。

私は何年か前に、アウクスブルグで集会を開きました。教会の行事に使う広場にテントを張りました。主催者は土曜日の深夜開催というアイディアを思いつきました。しかし、そのことは直前まで公表されませんでした。大勢の人々が野次馬的な好奇心だけでやって来るのを防ぐためでした。私の仲間たちは深夜前に車で出かけ、閉店後のレストランやバーから人々を誘いました。帰ろうとしているお客やお店の人たちを車でテントまで連れてきたのです。人々が集まったところで私は壇上に上がり、集会を始めました。目の前には雑多な人々が集まっていました。お酒の飲み過ぎでふらついている人もいました。ちょうど私の前には、口にタバコをくわえた太った男性が座っていました。私はその時、この集会がうまく行くように神に祈りながら話し始めました。そして「神」という言葉を口にしたとたん、目の前の太

た男性が大声で言いました。「神様なんて、おりゃせんよ」。会場は爆笑で包まれました。私は彼に向かって言いました。「神様がいない？そのことを、どうしてあなたは知っているのですか。神様はいないと百パーセント確信できますか？」。するとこの男性は頭をかいて、口の中でタバコを噛みながら言いました。「まあ、そのことは誰もはっきりとは知らないんじゃないの」。そこで私はその人に向かって言いました。「そんなことはない。現に、この私は明確に知っています」。そして、イエス様を通して神をはっきりと知っていることを説明したところ、会場全体が静まり返りました。

ここで、私はこれを読んでいるあなたにもお聞きしたいのです。「あなた自身は、神様に対する確信をお持ちですか」と。そしてあなたに、確信を持つて言っていたきたいのです。「イエス様が十字架で私の身代わりとなって死んでくださったので、私

たちの罪は赦されました。私たちはもう神様に対して何の債務もありません。私はそのことを知っています。私たちの罪の代価はイエス様によって支払われました。すべては完了したのです」と。

このように確信を持って断言できるキリスト者は、実はそう多くないのではないのでしょうか。それはとても変だと思われませんか？キリスト者も、信仰を持っていない人も、神に対して何の確信も持てないままの状態で、平気で生きているのです。

もしも私が町中で誰かを呼びとめて、「あなたは神が生きておられることを信じますか」と尋ねるとします。するとその人からは「そうですね。たしかに神は存在すると思います」という答えが返ってくるかもしれません。しかし続いて、「あなたは、その神のものとなっていますか」と尋ねれば、その人は「分かりません」としか答えられないでしょう。多くの人は、この問題に対して非常にあいまいな

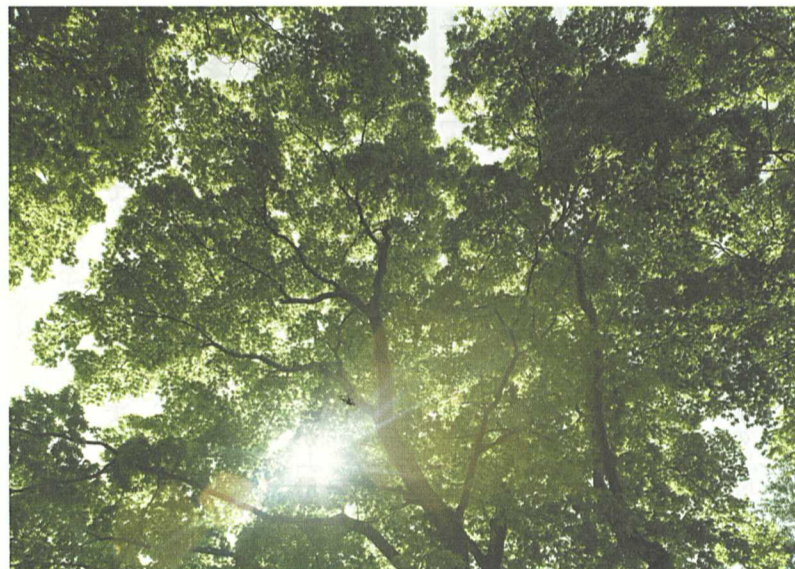
態度のままで生きているのです。

若い友人の一人が、最近、次のような体験をしました。彼は学生で、休日は建設現場で働いていました。現場の人たちは彼が教会に行き、青年会に属し、福音を伝えるのに熱心な若者だと知って、からかいました。「毎週、教会に行っているなんて、お前、気でも狂ってるんじゃないか」と。彼が「僕は日曜日だけでなく、平日も学びの会に行っています」と言うと、「お前はほんとに狂っているぞ」と言われました。「キリスト教は二千年も続いたそうだが、牧師たちは人を馬鹿にしているだけさ。聖書なんてくだらんさ」。このように、この若者はよってたかって攻撃されました。しかし彼は負けずに言い返しました。「あなたがただって、どっかの教会に行っていたんでしょ？」。すると、からかっていた人々は急に静かになって、一番の年長者が次のように言いました。「教会に行ってたかって聞かれりゃ、その

通り。この俺だって神は信じているさ。お前はまるで自分だけがキリスト者だ、と言いたいみたいだけど、俺だって神のことは信じているさ」

他の連中も同じように言いました。「お前は自分の方が俺たちより偉いとも思っているんじゃないのか。けど俺たちもクリスチャンだし、俺たちだって神を信じているんだぞ」と。そしてそこにいた皆が口々に言いました。「俺たちは神様を信じている。俺たちだってクリスチャンなんだ」と。彼らが言い終わった時、私の若い友人は次のように言いました。「それなら、どうして私をこんなふうにかからうのですか」と。すると彼らは言いました。「お前の言うことは、いちいち頭にくるのさ。だから、つい、からかってみたくなるのさ」

一見教会など縁がなさそうな荒くれ男たちは、皆で彼の信仰をからかい、攻撃してきました。けれどもいったん静まって真剣になると「俺たちだってク



リスチャンだ」というふうに言うのです。彼らは、神に対する態度があいまいで、その信仰に何ら確実なものがないことが分かります。ある時は信仰があり、またある時はまるで信仰がないかのように振舞って平気なのです。読者の方々も、このようにあいまいな態度で生きているではありませんか？

すばらしい確信を 与えてくれる聖書

ある人々は私にこう言い、また尋ねます。

「あなたたちは本当に信仰の確信を持っているのですか？ 『聖書について深く知らなくていい、ただ信じればいい』と耳にしますが、あなたはそう思いますか？ 聖書は、私には分からないことが多いのです。ただ言われたことを信じるしかないのです」。このような言葉から、多くの人が「クリスチャンは

信仰の確信をはっきりとつかめないままでいい。ただ信じていればいいのだ」と思っていることが分かります。

また、「キリスト教は一つにまとまっていない」ということもよく言われます。「カトリックにプロテスタント。ロシア正教。聖公会。プロテスタントの福音派の中にもルーテル派や改革派や他にもいろいろとありますね。一体どれが正しいのですか」と。

真のキリスト者の信仰がどのようなものかについては、新約聖書を通して知ることができます。そこには信仰によって得ることができるものは何か、何が確信できるようになるかがはっきりと書かれています。多くのクリスチャンが自分の信仰をあいまいなままに放置しているのはおかしなことですが、ちゃんと新約聖書を読めば、そのあいまいさはすぐ確信に変わります。そのことを短くお話ししましょう。

まず、新約聖書の中で語られている確信の第一は「神は生きておられる」ということです。人々は、神とは人間を超越した至高の存在であり、何か近寄り難い遠く存在と考えがちです。しかしそうではありません。神は今も生きておられ、私たちに愛の目を注いでくださる、温かい身近な存在です。それがはっきり分かるのは、真の神がこの地上にひとり子のイエス様を遣わしてご自身を啓示されたからです。どこでもいいから聖書を開いてみてください。そこには抽象的な宗教問題ではなく、「神が生きておられる」という、いろいろな証しが語られています。神はイエス様を通してご自身を啓示なさいました。また神が私を、またあなたをいかに愛しておられるかという確信も、同様に聖書から得ることができます。それは想像ではなく、明確に聖書に書かれています。

篇の中で、ダビデは次のように言っています。

しかし神は私のたましいをよみの手から買い戻される。神が私を受け入れてくださるからだ。

(詩篇 49・15)

ダビデは「私はいつか救われるだろう」とは言いませんでした。彼は確信を持って「神が私を受け入れてくださるからだ」と既定の事実として語っています。神を信じる者は神によって救われ、神の子どもとなっていることは既定の事実です。イエス様の弟子たちも、イエス様を通して自分たちの生きている意義が変化した、つまり罪と死からイエス様のいのちのうちに移された、ということをはっきりと知ることができたのです。あなたはそのことを確信できますか。

私はこう確信しています。死も、いのちも、御使しも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

(ローマ 8・38〜39)

神の愛はイエス様を通して私たちのところに伝わってきます。私たちはそれの中で想像するのではなく、確実に実在するものとして知っています。神の愛はイエス様を通して私たちに注がれます。イエス様の弟子であれば必ず次のように証しするでしょう。「私は神の愛の力を祈り求めます。その愛はイエス様にあつて啓示されるのです」と。

あなたはこの神の愛をご存知ですか。

聖書に出てくる人物は、皆、自分自身が神のものとされたことを、確信をもって知りました。詩篇49

私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてください。

(ローマ 8・16)

パウロも、私たちが神の子どもであることは聖霊ご自身が証ししてくださっている、つまり神の確証を得ている事実だ、と語っています。このような確証、確認は聖書の至る所に見ることができます。なぜクリスチャンの一部の方々がこのような信仰の確信を持たずにいられるのか不思議です。私たちがイエス様を信じ従ったその時から、神の救いの内に加えられ、死からのちに移されていることは、2×2が4であるのと同じくらい明白なことですから。

「信仰は分からなくてもいい、ただ信じるべきだ」と言う人々がいることも分からなくはありません。しかし、そのように思い込んでいる方々にお伝えしたいのは「神が生きておられる」ということ、そし

でもっと大事なことは、神はイエス様を通して私たちを愛してくださっているという事実です。今も生きておられる神のもとに立ち返った人々は、次のように言います。「イエス様が私たちをご自身のいのちに代えて救い出してくださいましたことを確信しています。また私たちは、私たちが神の子どもであるという事実をそれ以上に確信し、喜んでいます」と。

現代の教会のどこに、このような輝かしい確信を見いだすことができるのでしょうか。そのことを考えると、私たちは自分が聖書から離れてしまっており、今すぐ聖書に立ち返らなければならないということに気がつくのです。「ほんのわずかの信仰」で十分だ、ということはあり得ないのです。聖書に基づく信仰をしっかりと持つことにこそ真の価値があります。聖書から得られる確信、つまり神が私たちを愛し、私たちが神のものとなり得るということ、それこそが「真に価値のあること」です。このほか

の一切のものは、何の価値もありません。そして、聖書に基づく信仰の確信、それに基づく感謝と賛美こそが、神の栄光を輝かせるのです。そしてこのことを体験的に知っている人々は、必ず次のように言うでしょう。「私は聖書に書かれてあることを確信しています。そして唯一の神だけが私の誇りです。また、私は確信しています。まことの神だけが最も高く、最も良き方だということを。また神が私の友であり、また父でもあられるということ」と。

私は福音を伝える時に、「神が聖書によって明らかにされたことのすべてを強く信じる」ことがいかに大切であるかをしっかりと伝えていきます。キリスト者として人生を歩む以上、あいまいな信仰の霧の中をさ迷うことがあってはならないのです。真の信仰は、堅固な確信の上に立ち、神の栄光を輝かせるものであるべきです。その確信とは、イエス・キリストとその血を土台としています。私たちは、自分

が信じているものを「よく知っています」と言えるようでなければなりません。

このことをもう一度、別の角度から見ましよう。信仰におけるキリスト者の確信とは次のように言うことができます。「神は生きておられ、イエス様を通してみこころを啓示される。イエス様は唯一の真理である。イエス様は人々を罪から救い出し、神との和解を得させるために死んで、よみがえられた。私は、これらの事実を体験として自分のものにしていく」

言いかえると、キリスト者の確信とは、「神が生きておられ、イエス様を通してご自身を啓示され、人々の罪を贖うためにひとり子のイエス様をこの地上に遣わし、十字架にかかっていたのを捨て、人類の罪を赦し、しかも三日の後によみがえられた」ということを、自分のこととして「知っている」こと

です。私も信仰に導き入れられた時、神からこの確信をいただくことができました。この確信とは、たとえ一万人の無神論の教授たちが「イエスがよみがえったはずはない」と力説しても、「敬愛する先生方。私は私の救い主が生きておられる、ということを知っているのです」と、胸を張って言える力が神によって与えられているということです。たとえ一万人の科学者が聖書に書かれていることに反論しても「私は、それ以上に確信を持っています」と言えることです。たとえ全世界の人々が聖書に書かれていることを否定しようとも、「私は、私の信じている方を知っています」と言えることです。そして全世界があき果て、失望し、嘲笑した後にも、私たちは依然として次のように言うでしょう。「なぜなら、私は確固たる確信を持っています」と。このように聖書の中から得られる信仰の確信は確実で不動なものなのです。



あなたは信仰の確信をお持ちですか

ここであなたご自身にお尋ねします。あなたはすでにこのような信仰の確信をお持ちですか？それともまだ持つてはられないでしょうか。もしあなたが次のように思われるなら、今まで私が語ってきたことは決して無駄ではなかったでしょう。「私は自分がキリスト者だと思ってきましたが、そうではありませんでした。私の場合、まだいろいろなことがあいまいなままになっています」

オランダで開かれた集会でのことです。真夜中の二時頃、ドアをノックする音がしたので起きて開けると、集会に集っている若者が大勢いました。私が「どうしたの？」と尋ねると、一人がこう答えました。「私たちは自分がキリスト者だと思っていました。しかし今、まだキリスト者になりきれしていない

ことに気づいたのです」と。そして彼らはそのことで不安になり、夜中の二時ではありましたが、それをはっきりさせたかったのです。私たちの信仰が聖書の示す信仰の確信から遠く離れていると気づくことは、大変価値のあることです。

偉大なイギリスの伝道師ス波尔ジョンはかつて次のように言いました。「信仰は霊的な感覚でつかめるものです」と。私たちにはこの世界を認識するために、五つの感覚が与えられています。視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚という五感です。それらによって私たちは三次元から成るこの世界を認識することができます。しかしこの五つの感覚だけでは持ち合わせていない人間は、神の存在を感じることができません。そして次のように質問します。「神様はどこにおられるのですか。私は神様を見ることができません。イエス・キリストも見えません。ですから何も信じられないのです」と。神を信じることによって

て聖霊が私たちに光を当ててくださると、霊的な感覚をいただくことができます。見ることに、聞くことに、触れることに、味わうことに、匂うことだけでなく、まったく別の世界を認識できるようになります。聖書は次のように言っています。

その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。
(ヨハネ 17:3)

最近、有名な大会社の社長さんを訪ねました。彼の会社は町の半分ほどが見渡せる高層ビルの一角にあり、私たちは広大なオフィスの社長室で話しました。必要な用件が終った後で、私たちはざっくりばらんな話をしました。その時、彼は「牧師さんとお話してできるとは興味深いですね」と、次のような話を始めました。「私は、終戦後に聖書についての講演

会に行ってみたことがあります。こう言っては何ですが、聖書の話というのは、ずいぶんとあいまいな点が多いように思えました。その講演会のテーマは、キリスト者と経済、キリスト者と軍備拡張、またキリスト者と軍備撤廃、キリスト者と教会というようなものでした。しかし実際のところ、キリスト者とはどういうものかが、講演会では分かりませんでした。おそらく、主催者自身がはっきりと分かっているのだ、と見受けられました」と。

この非難は放っておけません。で、私は言いました。「あなたは誤解しておられるのかもしれませんがね」。すると彼は「キリスト者って一体どういうものなのか、はっきりと説明できますか」と言うのです。そこで私は、「はい。もちろんはっきりとお答えできます。あいまいなことは何もありません」と言いました。ところが彼は、皮肉っぽく付け加えました。「キリスト者って、警察と対立しない人のこ

とだ、とか、教会で洗礼も葬儀もする人のことだ、なんて言われていますが?」。私はそこで続けました。「社長さん、いい機会だから、キリスト者とはどういう人のことを言うのか聞いてください。キリスト者とは心の底から次のように言うことのできる人々のことです。『私はイエス・キリストが私の主であることを強く信じます。主イエス・キリストは永遠の父なる神のひとり子であり、同時に処女マリヤからこの世に人としてお生まれになったお方です。この方は、私の救い主としてご自身のいのちを捨てて、この世に迷い破滅に向かっていった私のような者をも贖ってくださいました』と。社長さん、あなたも今のままでは『失われた人間の一人』なのですよ」。

私がこのように言うと、彼はうなずきました。私はさらに続けました。「イエス・キリストは、失われ、破滅に向かっていた私たち人間を救い出して、すべての罪と悪魔の支配から解放してください、また死

にも勝利してくださったのです。社長さん、私たちのいのちを悪魔の支配から買い取って、勝利されたのですよ。聖書にはこうあります。『ご承知のように、あなたがたが先祖から伝わったむなし生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはならず、傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。(1ペテロ 1:18-19)』と。

私は話し続けました。「何の罪もないイエス様の尊い血によって、私たちは罪から贖い出され、彼のものとなされたのです。ですから真のキリスト者はこう言います。『私はイエス様のものです。イエス様は血潮によって、私を罪と死から、そして地獄から買い戻してくださいました。そのことを私は知っています。』」と。しばらくの間、沈黙が続きました。やがて彼は私に尋ねました。「私は一体どうすればそこにたどりつけるのでしょうか」と。私は答えました。「先ほど秘書の方からお聞きしましたが、こ

れから休暇に入られるそうですね。私は帰ったらすぐお宅に新約聖書を送らせていただきます。どうか休暇の間、ヨハネの福音書から読み始め、毎日少しずつでも続けてください。そしてその後にお祈りをしてみてください。そうすれば、さっき私がお伝えしたことがよく分かります。キリスト者の信仰は新約聖書によって確実なものとして伝えられています。書かれてあることは客観的な真実であり、イエス様を信じることにより、私たちは体験的にそれらのことを確信するようになります。それが『救われる』ということなのです。そのような確信を、ぜひあなたもお持ちください」と申しあげました。

私たちが神に受け入れられたこと、つまり神の子どもとされたことを確信しなければ、私たち人間は真に生きて行くことができないと思います。

ある若者に「君はイエス様を愛していますか。イエス様が君を受け入れておられる事実がはっきりと

分かりますか。君がイエス様のものとされたという確信がありますか」と尋ねたことがあります。すると、その若者はこう答えました。「はっきりとは分かりません。自分の中にまだ戦いがあります」と。

イエス様によって自分が受け入れられたことをはっきりと知らなければ、どうして私たちは生き続けていけるでしょうか。「神は生きておられる」と確信をもって言うことのできないキリスト者や、この世のお金のことはきっちりとしていても神のことはあいまいにしている人は、自分がキリスト者であるとは言えないと思います。新約聖書によれば、キリスト者とは、「私は、イエス・キリストが私の主となられたことを信じます」と断言できる人のことを言います。多くの場合、自分がキリスト者であると言っていないが、実はそうでないことがよくあります。

何とみじめで危険なことでしょう。その人は、実はまだ真に救われていないのです。

どうすれば確信を持って生きて行けるようになるのか

結局、すべての問題は確信を持って人生を生きて行けるかどうかにかかっています。この「確信」こそ人生における最優先の課題です。この問題に明快な答えを得るためには、あなた自身がまず神に祈り、率直に尋ねてみる必要があります。そして規則正しく聖書を読み始めてください。主の前に毎日十五分間の静まる時を持つてください。

ここで一つ大切なことをお話しします。信仰の確信は「理性を通して」得られるものではなく、「良心を通して」得られるものだということです。

聖書と神について多くの人々と話す時、信仰を持ってない言い訳にしばしば直面します。例を挙げましょう。ある人は言います。「聖書を信じることは私にはむずかしい。だって、聖書には、おかしい矛盾が

あるでしょう？ 確か聖書にはこんなところがありましたね。人類の始祖アダムとエバはカインとアベルという二人の息子を作った。しかしカインはアベルを殺し、その後、地上をさまよい、妻を得た。しかし、その妻になる女性は一体どこから来たのですか？ その頃地上には彼らしかいなかったのだから、一体どこから妻を見つけることができたのでしょうか？ こういうところが私が聖書を信じる上での妨げになっているんです」。頭のいい人々は、よくこのようなことを言って、聖書のあげ足取りをします。自分の不信仰の言い訳にするのです。私は次のように言いました。「なるほど。ところで、あなたは聖書を読んだのですね。今も当然お持ちでしょう。聖書にはどのように書いてあるか、もう一度読んでみてください。聖書のあら探しをして、じっくり研究するのも、決して悪いことではありません。なぜなら、それによって聖書をよく読み、結果として信仰に導か

れる人々も多いからです。カインの妻の問題は、聖書では次のように書いてあります。要約すると『カインは地上をさまよい、そして妻を知った』と。もともと妻は連れて行ったのです。その妻とは一体誰だったのでしょうか。アダムとエバにはたくさん息子と娘がいました。聖書には、神が一つの家庭を人類の起源として定められたことが記録されています。ですから、カインの妻はその一人だったのです。人類が地に満ちた後で、神はこのような結婚を禁じられたのです」と。

しかし、このように聖書の記述を正しく説明し、疑問を解決してあげたとしても、果たしてその人はそれによって信仰を持つことができるでしょうか。また別の、あげ足取りの質問を用意して、次々と議論になるに違いありません。たとえ何千という質問に答えたとしても、依然として彼は暗闇の中に留まり続けるのです。信仰は、理性を通して、それも初



めから否定的な心を通して得られるものではありません。それはむしろ人間の良心の問題なのですから。

私の前任者ユリウス・ダーマンという人のところに、ある時、若い青年が訪ねて来て、同じような質問をしたそうです。その時、彼は次のように言いました。「イエス様は、そんな重箱の隅をつつくような質問に答えるために、この世に来られたではありません。イエス様は罪人を救うために来られたのです。あなたが、自分はみじめな罪人であるという意識が持てた時に、もう一度訪ねていらっしゃい」と。良心の呵責にさいなまれ、自分の人生は何か間違っているが、それを自分ではどうすることもできない、という意識を持つ人々が、素直に救い主を信じるようになるのです。その場合、聖書を理性で理解することは後についてきます。

ある時、私は病院へお見舞いに行きました。その部屋には六人の男性がいましたが、私が部屋に入る

と、彼らはうれしそうに私に挨拶をしてくれました。やがてその中の一人が「質問があるのですが」と切り出した時、私は何かワナが仕かけられているぞと直感しました。別の一人が私にこう尋ねました。「あなたは神が全知全能だと信じていますよね。それなら、あなたの神は自分で持ち上げることのできないほど大きな石を造ることができますか。それが不可能なら、全知全能だとは言えなくなりますよね」と。私は静かに答えました。「そんな質問に答える必要などないでしょう。あなたはそんなことで眠れないほど悩んでいるわけでもないでしょう。それよりもあなた自身のことでも眠れない、という問題があるのではないですか？それはどのようなことですか？」。すると彼は少しためらった後に答えました。「私はある女性のことで悩んでいます。現在、彼女は妊娠中ですが、私たちは実はまだ結婚していないのです」と。私は答えました。「それはたしかに問題ですね

では、それについてお話ししましょう」。彼は非常に驚いて言いました。「えっ、この問題は信仰とはまったく関係ないのではないですか」と。そこで私は次のように説明しました。「先ほどの大きな石の問題は、信仰とはまったく関係ありません。しかし、あなたの女性問題は信仰と関係があります。あなたは罪を犯したのです。神の律法を守らなかったために、あなたはその女性を誘惑したことになります。よく考えてみてください。今あなたは大きな罪の中にいるのです。神があなたの罪を赦してくださいるためには、あなたが自身が生ける神に立ち返り、悔い改めることが必要です。神に対して、次のように言ってください。『私は罪を犯しました』と。そうすれば、あなたを助けることのできる救い主が、あなたのすぐそばにおられることが分かります」。その若い青年は、私の話じつと聞き入っていました。突然、気がついたのです。「イエス様は、私の悩み、良心

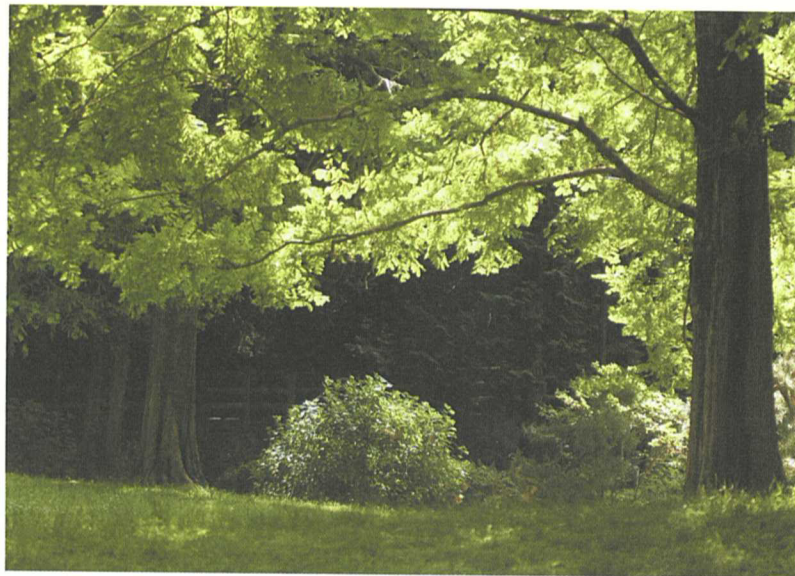
の呵責（かしやく）を心配してくださる方だ。イエス様は私を助けることのできる方だ。イエス様はこんな罪にまみれた私の人生を助けることのできる方だ」と。この青年は理性で信仰にたどり着こうと思っていました。けれども、自分の良心の呵責に触れた時に救われたのです。

救いの確信を得させるために、へ理屈をこねるだけの質問に答える必要はありません。良心の声に従って、ただ一度、自分が罪を犯したことをはっきりと認めさせることが必要です。そうすれば、十字架にかかってくださった救い主のことが分かるようになります。自分の罪が赦されている、ということを体験的に知ることができます。そしてイエス様が自分を受け入れてくださった、ということが分かるようになります。信仰の確信にたどり着くのは、理性によってではなく、良心を通してです。また、救いの確信を得るためには、冒険をする必要があります。

教会によくあるステンドグラスは外から見れば黒にしか見えません。けれども教会の中に入っていると、光を通して色々なものが輝いて見えます。キリスト者の信仰もこれと同じです。外から見ている限り、何もつかむことができません。今のあなたの周りは真っ暗に思われるかもしれませんが。しかし危険を冒して中に入り、イエス様と共にやってみましょう。救い主に自分自身を明け渡して委ねましょう。そうすれば全てが明らかになってきます。どうかあなたも死からのちへと一歩踏み出してください。そうすればキリスト者としての信仰が一体どういうものか、一気に見えてきます。

主イエス様は何千人もの人々の前で、次のように言われました。

人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。
(ヨハネ 3:3)



イエス様は、いつも多くの人々に神の国を伝えられました。しかし、それを聞いた人々の中には、その場から立ち去った人々もいたことでしょう。わずかな人々しか残らなかったこともあったでしょう。そんな時、イエス様は周囲のお弟子たちにこう言われたのではないかと思います。「あなたがたも、行きたければ行ってよい」と。

神の御国に入るには何の強制もありません。神の御国は自由意志に任され、求める人々にだけ開かれています。イエス様はきつと、「あなたがたも行つてよい。失われた存在になってよければ行きなさい。神なしに地獄に向かって走って行つてもよい。好きなようにしなさい。でも、それで本当にいいのですか」とおっしゃりたかつたでしょう。深い悲しみと愛をもつて。ですから、このように言われた時に弟子のペテロは考えたに違いありません。「好きなどころに行けばよいと言われても、一体どこに行けば

いいのだろう。昔みたいに辛い仕事と労苦しかない人生、罪にまみれた人生に戻るのか。いや、それだけはおめんだ。その道は死と地獄につながっているだけだ」と。そして再びイエス様を見上げた時、一つのことが確実に分かりました。それは、ただイエス様と共に歩む人生にしか価値はない、ということ。そして彼は次のような確信に達しました。「主イエ

ス様、私たちはどこにも行くところなどありません。なぜなら、あなたご自身が永遠のいのちのこばを持つておられるからです。私たちは、あなたが生ける神の御子であられることを認め、これからも信じて生きて行きたいのです。私はあなたのおそばにいます」と。このことは、その後の彼の行動が証ししています。

人はこのようにして信仰の確信にたどり着きます。人は自分の人生をふり返った時、イエス様だけがやり直す機会を与えてくださる唯一の神であることに気がつきます。これを読まれているあなたも、確信

を持つて次のように言えるようになることを、私は心から願っています。「あなたは生ける神の御子キリストです、と私たちは信じています」と。

最後に、信仰を持ったばかりの方にお伝えしておきたいことが一つだけあります。「私は心を主イエス様に明け渡したのに、信仰の確信が持てません。一体どうすれば確信が得られるのでしょうか。私の人生には、まだたくさんの罪が残っています」。このように真剣に自分を見つめておられる方には、次のように言いたいと思います。「あなたは自分の罪がすべてなくなつて初めて、救いの確信が得られる、と考えておられるのではないのでしょうか。そうではありません。イエス様の十字架のみわざによる罪の赦しは、すでに二千年前、一度きりで完了しているのです。私たちは救われた後も、昔の性質を宿しているのです。時に過ちを犯します。でも、赦されているという事実は揺るがないのです。つまり、私たち

が罪を犯して悔い改める時、イエス様はその罪をもはやないものとしてくださるのです。これがイエス様による救いの真実です。このことを深く体験することができれば、きつとあなたは今以上にイエス様を知ることの確信に到達することでしょう」と。

放蕩息子のお話を、ご存知でしょうか。放蕩息子は家に戻つて告白しました。

おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。
(ルカ 15・21)

父親は彼を受け入れて、喜びの祝宴を催しました。ここでちょっと、聖書には書かれていないことを想像してみましょう。祝宴の最中、この息子は過つて高価なワイングラスを床に落としてしまったと思つてください。長いこと豚の世話をしていたせいで、グラスの扱い方さえ忘れていたのです。それを見た

父親は「お前はひどい奴だ。何てことをしてくれたのだ。許すわけにはいかない。豚の世話に戻れ」と言うでしょうか。いいえ、そんなことは決してあり得ないのです。父親にとって一度受け入れた者は、生涯受け入れた者です。注意はするでしょうが、決して息子を追い返したりはしません。人は、いったんイエス様のものとされた後、生まれつきの悪い性質が残っていることに気づくことがあります。主に立ち返った後、敗北を経験して絶望に陥るのでなく、ひざまずいて次のように祈ってください。第一に「このような私ですが、まだ、あなたのものであるということに感謝します」。第二に「どうかあなたの血潮によって、私を赦してください」、そして第三に「私の古い性質から解放してください」と。一番大切なのは、「こんな私でも主のものだ」ということを感謝することです。

救いの確信を持つ人は、次のことをよく知ってい

ます。それは、「自分は父なる神の家に戻り、今は聖（きよ）められるための戦いをしているのであって、もはや、家にいることを許されたり、追い出されたりすることを繰り返す、不安定な者ではない」ということです。

日々罪を犯すたびに、一から新しく神の救いを求め、新しく救いをつかみなおす、ということだとしたら、それは何とみじめなことでしょうか。例えば私の子供たちが毎朝私のところにきて「パパ、今日もあなたの子供でいていいですか？」などと聞く必要など全くないでしょう？彼らは私の子供に違いなのです。それと同じように、一度神の子ともとされた者は、神の子ともなのです。そして聖められるための戦いも、神の子ともとして行うのです。

ですから私は、あなたが「神の子ともとしての輝かしい確信」をしつかりと持たれることを心から願っています。

